

たくさんの人が見やすい配色にするには？

3年2組3番 岡野葵陽

3年2組31番 油谷瑚春

keyword:「色覚」「カラーユニバーサルデザイン」「多様性」「バリアフリー」「配色」

1. はじめに

人間が生活していく上で最も大切な感覚器の一つに目があり、毎日の生活の中で多くの情報を目から得て状況判断している。一般的に目の能力を判断する基準の一つが視力である。さらに、目は色を判断する色覚という能力を備えている。人それぞれ色の見え方が異なることを知り、色覚に興味を持った。色覚に不具合があると、目の前で起こっている出来事を正しく判断することが困難になる。例えば、信号の色が判断しにくく、見分けにくい。色を判別する能力が低いことで色の見え方が通常の人と違う症状を色覚異常といい、色を全く認識できないというわけではなく、日本人男性の場合20人に1人が色を判別しづらいという軽い症状である。2007年に、超高齢社会を迎えた日本では高齢者、障がい者を含め誰もが初めから使いやすいように商品をデザインするユニバーサルデザインに注目が集まっている。色のユニバーサルデザインの考え方をカラーユニバーサルデザインという。正常色覚者と色覚異常者の見え方の違いへの理解を深め、色を上手に組み合わせるだけでなく、文字の形や、塗り分けパターンを併用してできるだけ多くの人に正確な情報を伝えることを目指す考え方として広まっていった。カラーユニバーサルデザインについて調べている内に日常生活や、身の回りの身近なモノに活用されていることを知り探究を始めた。

2. 序論

たくさんの人が見やすい配色を作るためにはどのようなことが必要になるのか。先行研究として一般色覚者と色覚異常者との色の見え方について調べた。人が色を判断するときに重要なのは赤、緑、青の3つの色である。しかし、色覚異常者は色を判断するときに重要な赤、緑、青の3つの色が見分けにくくなっている。見た目はとてもキレイな色の情報も実は特定の人にとっては、見えにくいという問題が生じているということがわかった。モノクロ情報からカラー情報への移行により今では、スマートフォン、タブレットといった電子機器のディスプレイ、バスの路線図、雑誌、ホームページなど、身の回りのほんどのものが色とりどりに表現されている。カラーユニバーサルデザインは、小中学校、高等学校の教科書に導入され、最近では、銀行のATMの操作画面、私たちの身の回りにある火災報知器にも、色覚異常者に配慮したデザインが積極的に使われている。これらのことから、カラーユニバーサルデザインに配慮したモノが普及してきていることが分かった。

3. 本論

独自研究として駅の構内やオープンキャンパスで大学を訪ねた。駅の中では、一目見てわかりやすい配色で作られた案内板や駅の看板が多く存在していた。しかし、大学のキャンパス内の看板の中には図1のように一般色覚者でも見にくいものがあった。一般的に背景が黒で文字が赤は見にくい組み合わせになっている。なので改善案として、背景は黒のまま文字を黄色にすることで見やすくなる考えた。互いに補色をなす色、よく目立つ色の組み合わせを使う。黒色と黄色の組み合わせは警告や注意を表すことになっているので、街中でよく見る工事の看板や立ち入り禁止の看板に利用されている。文字を見やすくするためには、文字の太さを太くしてみた

り、背景を作ってみたり、縁をつけるなどの工夫で見やすくなることがわかった。(知られざる色覚異常の真実 市川一夫 2015)

(図1)



(図2)

(図3)

改善後

改善前

中央食堂

中央食堂

4. 結論

カラーユニバーサルデザインにも課題がある。それは、一般に先天色覚異常の人の見分けやすい色は、加齢による色覚異常者にとって見えにくいということである。すべての人に見分けやすい色を選ぶことは簡単ではない。なので色覚のバリアフリーは色の組み合わせ方を考えるだけでは表すことが難しい。色の明るさを変えたり、形の情報を取り入れたりするなどの対策が必要である。また若年層の多い学校などでは先天色覚異常者、高齢者が多い場所などでは加齢による色覚異常者を中心とした環境づくりを考えることも対策のひとつだと考える。

5. 参考文献・出典

知られざる色覚異常の真実 市川一夫 2015